

木曾川旧河道の地名考

奥田建設	正会員	奥田昌男
昭和コンクリート工業 (株)	正会員	中根洋治
日本コンクリート工業 (株)	フェロー会員	可児幸彦
立命館大学理工学部	フェロー会員	早川 清

1. はじめに

平成の大合併で、多くの市町村の地名が失われた。地名の多くは行政地名なので、現地の地勢を表していない地名も見受けられる。しかし、小字地名は市町村合併による地名変更をまぬがれ、昔の地勢などの名残を残しているものも多い。本研究は、木曾川旧河道沿いの地名を調査・考察したものである。

2. 木曾川の旧河道¹⁾

天正期 (16 世紀) 以前の木曾川は、木曾七流などと呼ばれて、図-1 に示すように濃尾平野を幾筋も流れていた²⁾。当時の幹流は濃尾の国境になっていた境川であったが、天正 7 (1586) 年 6 月の大洪水でその流れが現在の河道に近いものとなった。木曾七流とは、上流から順次、石枕川 (一の枝)、般若川 (二の枝)、浅井川 (三の枝)、黒田川 (四の枝)、境川、領内川、足近川などをいったようだ。³⁾ 七流とは、支流が七筋あるという意味ではなく、支流が多いという意味で「七」字をあてたものようだ。他にも小信 (このぶ) 川、佐屋川などが知られている。旧河道の多くは、尾張藩による御囲い堤の構築 (犬山市木津～愛西市梶島間左岸の延長約 48km) によ

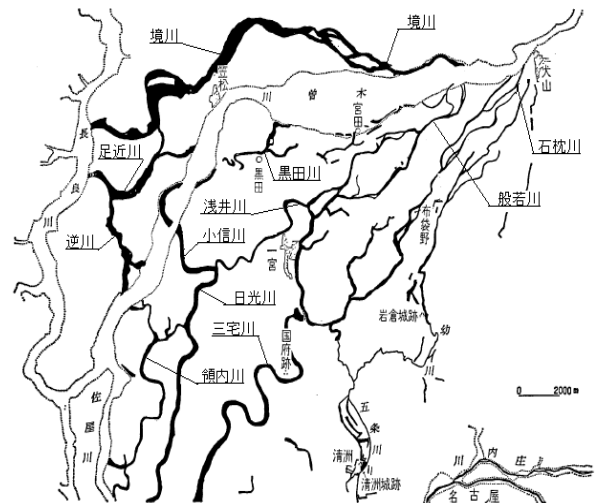


図-1 旧木曾川の支流 (『木曾川町史』に加筆)

ってさえぎられ、旧河道跡地はその後、農地などに開発転用されている。こうした旧河道筋には、川に因んだ地名が付いていた地域も多いが、平成の大合併などで消えつつある。例えば、小牧市藤島地区は一の枝の下流である五条川が流れ、砂原という大字があったものの、それが藤島一丁目などという無機質な地名に変更されている。そこで、旧河道沿いで地勢の面影を残す川に因んだ地名の実態調査結果を次に示す。

3. 木曾川旧河道の地名

一の枝の枅は犬山市の木津 (こつ) にあり、木津は木曾の山から流した木材の着く場所であったようだ。犬山市木津地区は、対岸にある各務原市伊木山に阻まれた木曾川の水が左岸の犬山緑地をえぐる地先である。一の枝の流路は現在、青木川と呼ばれている。青木という地名は、旧河道の土砂が堆積した扇 (あおぎ) 状地の意味だともいわれる。⁴⁾ 二の枝の般若川の般若とは赤泥谷 (はにや) の語訛で、木曾川の乱流による濁水の泥が乾いた土地なので「填谷 (はにや) と呼なるべし」と説明⁵⁾ されている。三の枝の浅井川の浅井とは地下水が浅い、即ち湿地につけられる地名のようで、この地の沼田を浅井沼と呼んだことからついた地名のようである。このように木曾川の旧河道には、川に因んだ地名が大字名などに、今も残されている。

4. 小信川跡の小字地名

地名は、はじめに小地名がおこり、大地名は行政が確立した後の産物なので後になり、しかも行政地名が多くなる。小地名の小字名は行政の影響を受けにくく、当該地区の地勢を比較的によく残している。その実例を小信川跡地で見してみる。図-2 に示す明治 26 年大日本帝国陸地測量部発行の 2 万分の 1 の地形図「竹鼻町」には、小信川跡が比較的明確に残されている。この地形図と現在の国土地理院発行の 2.5 万分の 1 の地形図などを重ね合わせて小字名を拾い出すと、表-1 のようになり、川に因んだ小字名は次のようになる。

河田揚;アゲ地名は周りよりやや高所の地名である。堤町;これは明らかに堤防地名である。

柳枯草場;柳や枯草のある水辺の採草地名。御囲い堤の内外法面には松竹を植え、根を張らせて堤防の決壊を防ぐと共に、堤防の危険・決壊個所の補強材に使用し、松竹を「流し松」「流し竹」と称した。⁶⁾東西鶉飼分;鶉匠が住んだ場所の地名。

葎山;水辺に生える葎(よし=葦)の茂る地名。古川;文字どおり古い川筋を指す地名で、三の枝下流の日光川の旧河道は古川と呼ばれている。⁷⁾

「…切」地名;切り開く、即ち新開・新墾・新治の意味に多く使われる地名。⁸⁾小信川跡地は現在でも田畑が多いから、新開の意味であろう。小信川跡が起から南進し、西五条～北今へと湾曲して東進しており、水流が当たる湾曲部の右岸に「…切」地名が連なっているのは河川工学上からも興味深い。一方、「…新田」字名は左岸寄りに多かった。

与三ヶ巻;この地名は間接的に地勢を表している。御囲い堤を構築する際、小信川を締め切ろうとしても、堤防下手から河水渦が湧き上がり、難工事となった。そこで、小信の人・与三兵衛(よそべえ)という男が自ら進んで人柱になり、締め切り工事は無事に完成した。与三ヶ巻とは、人柱の与三兵衛に因む地名であり、人柱観音も近在する。

5. 結論

濃尾平野に残された木曾川の旧河道跡には、川に因んだ地名が多く残されている。こうした地名の存在する場所は、地下水が浅かったり、砂地盤であったり、低湿地であったりして、洪水や地震災害(特に液状化)を受け易い土地柄であろう。地名は文化であるし、このような潜在的危険を認識する為にも、地勢に適合する地名は、無機質な行政地名や合成地名へと安易に改名せず、残されるべきものとする。

参考文献

- 1) 中根洋治ほか、『歴史的堤防を伴う旧河道の調査』、歴史的地盤構造物の構築技術および保存技術に関するシンポジウム No.141、地盤工学会、pp.13-20、2008
- 2) 『木曾川町史』、木曾川町、p. 42、1981
- 3) 『領内川史』、領内川用悪水土地改良区、pp. 87-88、1981
- 4) 小川豊、『川を考える地名』山海堂、pp. 18, 21、1989
- 5) 津田正生、『尾張国地名考』、愛知県海部郡教育会、pp. 246, 253, 274、1916
- 6) 『尾西市史』、尾西市役所、pp. 上 246, 下 8、1998
- 7) 『起町史』、起町役場、pp. 32-34、1954
- 8) 山中襄太、『地名語源辞典』、p. 122、1968



図-2 小信川跡(明治26年竹鼻町、陸地測量部に加筆)

表-1 小信川跡(隣接)大字名・小字名

右岸大字名	右岸小字名	小信川跡小字名	左岸小字名	左岸大字名		
←← 現 木 曾 川 ←←						
起	河田揚	堤町	本陣山	柳枯草場		
	東茜屋	与三ヶ巻	西鶉飼分	西鶉飼分		
			東鶉飼分	東鶉飼分		
			上郷西	上郷西		
		下郷西	下郷西			
西五城	西生出	東茜屋	若宮	東五城		
	上切	中川田	若宮前		若宮前	
			上川田		上川田	
			寺廓		寺廓	
中切	飛石北	古川	古川			
下切		荒子中切	下出			
北今	西田面一ノ切	中切浦	西生出	西蛭子		
	西田面二ノ切				宮西	
	葎山					西新田
	苗代三ノ切		郷内西			
	下渡			高坪前		
	林家			比丘尼道西	西新田	
	再鳥三ノ切		板倉前田切	郷内西		
林四ノ切	古川	古川	古川			
林三ノ切						
←← 現 日 光 川 ←←						